

平成30年度第3回概説部会議事録

日 時：平成30年11月22日（木）9:58～11:02

場 所：赤れんが庁舎1階 文書館打合せ室

参加者：桑原編集長、平野委員、谷本委員、榎本
委員、川上委員、蓑島委員

事務局（蘆原・中谷・伊藤）

1 開 会

2 議 事

- (1) 概説の編集方針についての検討
- (2) 委員の分担について
- (3) その他

3 閉 会

1 開 会

【桑原部会長】 ただいまから第3回概説部会を開きたいと思います。

10月4日に開催した第2回部会では、出席した委員の半数が新しく参加されたメンバーだったことから、北海道史編さん事業に関するこれまでの経過報告に重点が置かれまして、委員の皆さまから様々なご意見を頂きました。ありがとうございます。

しかし、寄せられたご意見を、現在の北海道史編さん事業に、直ちに反映させることはなかなか簡単ではありません。どうしてかと言いますと、皆さんにお示した現行案は、昨年度に開催されました3度の有識者会議と今年6月の編さん委員会という、一定の手続きを踏んで決定されたものだからです。

この部会の役割は、北海道史の第1巻に予定されております「北海道史概説」(仮称)の編集方針の内容を具体的に検討することを目的としています。

本日の議題は、先にご案内しましたように、第一に、「北海道史概説」の編集方針としまして、ビジュアル的要素を盛り込んだ、新しい視点からの概説がどの程度可能であるかの検討をしていただきたいと思います。第二に、各委員の分担について話し合ってください。

以上の二点を中心に進めてまいりたいと思いますので、よろしくお願ひします。

2 議 事

(1) 概説の編集方針についての検討

【桑原部会長】 まず資料1を見てください。通史型、トピック型、図録型1、2などとりあえず4種類を提示しています。このような先行事例があることを念頭におきながらご意見を出していただきたい。

【榎本委員】 枠組みについてはここでは話し合わないということですね。

【桑原部会長】 大きな枠組みについては、先ほどお話したように、一定の手続きを踏んで決められたもの。ここでは概説の編集方針を具体的に議論していただきたい。

【榎本委員】 規模などの発想がしっかり固まっていないと議論にならないのではないか。

通史との区別に関しては、前回、『新撰北海道史』や『新北海道史』の概説、第1巻のイメージとのことだった。

【桑原部会長】 第1巻に概説が置かれているから、それに相当するポジションだという意味で、同じ内容のものを作るという意味ではない。『新撰北海道史』や『新北海道史』の場合は本体の要約的要素が強い。

【榎本委員】 『新北海道史』では、通説が6000頁くらいに対し300頁の概説を作った。『新撰北海道史』も似たようなこと。本体がないのに概説を作るという考え方は疑問。

- 【桑原部会長】 通説本体が無くても概説は作れると思う。本体が無ければ作れないというなら本体の要約になるのでは。
- 【榎本委員】 本体がある意味その時期の研究現状を捉えたものであって、概説はそれに基づいた短いもの。
- 【桑原部会長】 私はそうは思わない。いまは概説の編集方針を議論してもらいたいので、議題1に入りたい。
- 【川上委員】 資料1に示された今までのどのタイプにするかとなると、『新北海道史』以降の研究状況などがあるので、基本は、ビジュアルにしようとして何であろうと通史になるのかなと私自身は理解している。
- 【桑原部会長】 言い忘れたが、概説を1冊にするかどうかは固まっていない。上、下あるいは一巻、二巻というふうに分けて本を作ることは場合によっては可能。
- 【平野委員】 1つの考え方として、これまでの研究成果を踏まえてしっかりと書いていくとなると、かなりの分量が必要で、そのためには、人員も体制も豊富にしないと難しい。
- もう1つ概説というものを考えると、『新北海道史』が1971年頃にできてから現在まで50年近い間に、資料1にあるように、概説書が何冊か民間から出ている。これまで出てきた概説書をどのように評価するかを検証した上で、一応現状で通説として理解できる内容を固めるという作業であれば、この体制と10年位で、資料を踏まえてしっかりしたものを書いていける。
- あまり詳しすぎるとボリュームがたくさんになるので、これまで十分取り上げてこなかったところをピックアップし、通史的に並べて全体として流れが分かるようにし、その中に図版も入れるというトピック型を前提として、全体の流れは通史を意識した章立てで書いていくのがよいのではないか。
- 【桑原部会長】 このメンバーだけで本を作るということではなくて、若干の+αは当然である。前回、考古の専門家を委員にお招きしたいという意見もあった。
- 【蓑島委員】 旭川の冊子（『目で見る旭川の歩み』）はかなりビジュアルを取り込んで見やすくなっているが、その反面、取り上げて欲しいことが十分に言及されていない。結局ビジュアル重視にして多くの方に親んでもらおうということと内容をしっかり書き込んでいくということは、どこかでバランスを取るとしても、両立は難しい。
- 道が出す道史であることを考えると、ビジュアルで一般向けという方針も大事だが、あまりビジュアルに引っ張られすぎて、本来押さえておくべき事柄が網羅できないということは避け、網羅すべきことを網羅することに力点を置くべき。
- 【桑原部会長】 ビジュアル的というのは、今年度の編さん委員会の中で意見があったので、それを反映させられないかということ。蓑島委員のようなご

意見がこの部会で主流を占めるのであれば、そうでなくても構わない。

【葦島委員】 その範囲の中で可能な限りにおいて図版を多用するというのが穏当なところかと思う。

【榎本委員】 私が携わってきた編集活動の経験では、テーマ的、トピック的なものにする、どうしても埋没する視点・観点・項目が出てくる。『北海道史事典』の時は、それぞれの年代でテーマを決めた後は最終的に書く人任せになってしまい抜け落ちたものは抜け落ちたままになって補充できないことになった。

例えば、600頁で通史を書く場合、かなりテーマが絞られることになるから、トピックスに近い形になりかねない。その間を埋める部分をどう連携するのかを考えていかないといけない。600頁で通史を万遍なく書こうとしても、書けないことは確実。どこで妥協するかという話になるし、もう少し自由に考えられないと、どうやっても不十分なものになりそうな気がする。

【桑原部会長】 歴史現象は無限にあるのだから、どこかで取捨選択しないと1冊2冊の本にまとまらない。歴史は全てを書き込むわけではないのだから。

【榎本委員】 間を埋めていくのが連携で、当然全ては書けない。どうやって落ちないようにどうしていくか、あるいは初めから落としていくのか、という議論になる。

【桑原部会長】 それは編集の過程で執筆していく人達の力量が試されるのではないか。前にも言ったように概説と年表だけは本体とは別に増刷して市販し普及を図るという北海道の方針である。1冊か2冊の本で北海道史の流れをつかんでいただくことも必要だと思う。大部の本を何冊も作ることも予算があれば可能かもしれないが、今回の場合10年でやるというのが道の方針であるのだから、それに従わないといけないと思う。

【榎本委員】 トピックス的なものとかビジュアル的なものでも通史的なものと考えても、そういった問題が起こるわけで、結局それが個人の裁量とか能力によるのだという話になるのだったら、結局穴が開いたままでよいという話になる。

【桑原部会長】 どう書いても抜け落ちる部分はある。だから、どういうふうに表示すれば、北海道史の流れが、最新の研究成果をベースにして道民に訴えかけられるか、というところは担当者の腕の見せ所ということを言いたい。その点は創意工夫でなんとかなると思う。万遍なく網羅的に全て書くということは考えられない。

【榎本委員】 後は執筆者個人の裁量・能力に任せるということになるのか。

【桑原部会長】 その辺は、実際に原稿を書く段階で、執筆者個人に任せるとはならず小部会で調整し工夫してくださいということ。

【榎本委員】 執筆する人間が編集会議的なものを開いて、意思統一というか、間をどうやって埋めるのか落とすのかは、その中で形成していくという

理解でよいですか。

【桑原部会長】 新年度以降に編目構成案を考える中でどこに重点を置くかという話が出てくると思う。当然その中で、2巻になるとしたら上、下2つの小部会が同時並行的に進むのではなく、常時打合せしながら進んでいくというふうにしなければ、北海道史として全体として統一性の取れた本にならない。編集会議のようなものを適切に適宜開くことになると思う。担当者に項目と締切を示すだけの投げっぱなしにすることは考えられない。

【榎本委員】 ぜひそうしていただきたい。

【谷本委員】 『新北海道史』の時に、概説編と通説編があって、それに対する大きな批判があったと聞いている。つまりそれは開拓史観ということ。しかも新北海道史の叙述スタイルというのは、いわゆる考古の時代から入って前史があって歴史があって開拓とその後の北海道の発展という叙述だった。それがかなり大きな批判を呼んだという認識を我々は共有している。今回の北海道史を編さんするにあたって、最初、戦後史だけを扱うという方針が示されて、やはり大きな批判があった。それはなぜかという、戦後史だけを新しく書くと、考古から1970年位までの間の部分が、北海道庁の歴史として上書きされずに残ってしまうという批判が懸念されたのだと思う。

今回私たちが概説という形でこれを引き受けるにあたっては、現在の北海道庁の歴史観を、考古から戦後まで、主語をどうするかとか、歴史観をどうするかとか、そうしたことをこの概説で担保しなければいけない。執筆者が、どういう歴史観であるいはどういう主語で、どういう項目をどういう叙述をしていくかは、どこかで擦り合わせをしておかないといけない。丸投げしてしまうと、ちぐはぐな、首尾一貫しない叙述になるという懸念を持つ。

先ほど川上委員がおっしゃったように、トピックとか図録にしてしまうと、概説にしかない時代の叙述をどういうストーリーで描くかが見えなくなる気がする。『新北海道史』のように本体がしっかりあって図録とかトピックとかであれば分かるが、旧石器時代から戦後までの歴史は概説にしかないので、トピックとか図録にしてしまうと、北海道庁は、どういう歴史を道民・国民に示していくのかが見えづらくなる気がする。結論としては、スタイルはどれであれ、通史型が、いわゆる本体がない部分の歴史については特に必要なのではないかという印象を持っている。

【桑原部会長】 概説の600頁という制約は一応あるのですか。

【靄原室長】 編さん委員会には一応1冊600頁という形で仮に諮り、それに対して委員会の方で特に異論も無く終わったので、大枠としてはその程度のボリューム感という認識。1冊600頁とは何が念頭にあったかという、通史型の1冊分という目途です。図録などにすると、60

0 頁では厚みが出てきてしまうので、違う方法で考えないといけない。

【桑原部会長】 概説が文字中心になったとしても、ボリュームが増えて2巻になるということを想定しても構わないのか。

【轟原室長】 議論の結果、上下2冊に分けないとできないということであれば、売り方の工夫とか、道としてのお金の出し方の工夫でなんとか乗り切れるのではないかと思う。

【桑原部会長】 今、谷本委員がおっしゃった『新北海道史』に対する見方として、当時から、近世史の部分は問題があると言われていた。当時は近世の蝦夷地の研究はあまり進んでおらず、研究者もいなかった。そのあといろいろな研究がたくさん出てきて、近世の北海道史の研究がずいぶん発展した。『新北海道史』で問題があるのは第2巻（近世以前）だけれども、第3巻の近代は開拓史観を丸ごと押しつけているわけではなく、よくできていると思う。

今回の場合、先史、古代から現代まで全部作り直すと膨大な経費と人員と20年くらいかかるわけで、今の道財政が厳しい中では難しい。それを10年でやるとしたら、戦後70年の現代の歴史に重点を置かざるを得ないという判断に傾いたということ。現代だけが強調されたとしても、当然のことながらそれ以前の歴史に目が行くのは自然で、概説の役割は当然重要になってくる。

【谷本委員】 『新北海道史』の、前史・考古の時代があり歴史の時代があって開拓の時代になるというストーリーが、今から見れば根本的におかしいので、ここで現在のストーリーを叙述しないと、その前のものがずっと残ってしまうと思う。残ったら残ったで道庁が責任を取ればいいのですが、ここで通史を書くのであれば、そういった問題を共有しながら、近代の部分も含めて編目構成の時に筋が通った形での叙述スタイルを皆で共有できるような時間は必要かなと思う。

【桑原部会長】 最初、北海道は、『新北海道史』の第6巻が昭和45年位で終わっているものだから、その後を継ぎ足すという発想だったわけです。道史協の皆さん他の方が、いろいろ見直して作り直すべきだと意見を出されたので、それを受けてこういう構想になってきた。その点はよかったと思う。

【谷本委員】 よかったです。だからここでしっかりやる必要があると思っている。

【川上委員】 私は道史協の事務局をやっているので、今度会議がある時、ここでこんなことが話し合われましたよということを報告しようと思っている。道史協としては要望書にあった考えのとおり。その立場から考えても個人的に考えても、あるいは谷本委員の考え方を踏まえても、先ほど言ったような通史型がよいと思う。

通史型の例に出ている①と②を比較すると、頁でいうと①が367頁、道新の②は上下で1000頁近くですので、今回は通史に匹敵する内容になるとすると②の上下位は欲しいというのが私の考え。

なおかつ、わかりやすくするとかビジュアルの問題のイメージとしては、高校生が使う教科書は1頁に1つ位ずつ資料や図版が載っていたりするので、ボリュームは道新の②の上下、ビジュアル的なものを入れるとすると高校の教科書、というのが私のイメージ。

【桑原部会長】 第2回部会の時に副読本的要素を盛り込んでという意見があったけれども、あれは北海道教育委員会が準備中だということなので、ここでは作る必要は無い。やはり、道史編さんとしては、専門性に徹した北海道史概説を念頭に置いてやっていただくということ。

通史の中で榎本守恵先生が作られ、我々が作り直した山川出版の『北海道の歴史』というのがある。要するに1冊で手に取って読み切れるという本も必要かもしれないが、そういうものは民間で既にあるのだから、道が出す以上、最大限に頑張って、なるべく史実を盛り込んで、許される範囲で通史を充実させたものを作るというご意見の方が多いようですね。皆さん、全体としてはそういうご意見ですか。

【榎本委員】 量的なものとはもかく、姿勢としてはそうするのが当たり前だという認識。40年経ってかなり蓄積が多くなっている。近世史は先ほどのとおりで、近代史も道内の新しい市町村史がかなり出ているし、かなりいろいろなことが増えている。戦後史も同じ。私は、どう進めていくかを考えていくと結局は量的な問題が一番ネックだと感じる。

【桑原部会長】 それはできるだけ追求していく。

【轟原室長】 他の県史の事例を見ていると、かなりビジュアル。いろいろな出版社が通史的なものを出している一方で、自治体では生の資料を出しているという傾向が最近はある。『新北海道史』の時には概説的なものを頭に置くということを多くの県がしていましたが、今あまりそういうことをしていない。そういう傾向だと感じます。

【谷本委員】 たぶん通史があった上でのビジュアルだと思う。今回は戦前史については通史がない。そこが他県との一番大きな違いで、ビジュアルだけを出してしまうということは、求められているとは思ものの、少しこわさがある。親委員会はビジュアルで出して欲しいということですが、戦後史は今回新しく通史ができるからできると思うが、通史がないところをビジュアルとかトピックだけにするのが気になる。かなり工夫すればよいのかもしれませんが、どういう工夫がよいのかイメージできない。

【轟原室長】 今回概説を作るというのは、今まで『新北海道史』から塗り替えられた部分をきちんと明らかにしていくことが使命だと思う。それを強調するやり方としてはトピック型とか、これで新しい歴史が分かったという資料を見せて解説を書くというやり方もあって、それは、通史で書くよりも、むしろ今の北海道史はこんな風になってきているというのを強調する手段として有効かなという気がする。ただ、流れを重視するとか、一つの主語で全体の流れを叙述するというのも一

方では必要だとは思う。

【平野委員】 章立ての立て方でずいぶん色合いが出てくると思う。章立てと全体の流れをどうやって作り上げるか、これまでの書き方も踏まえて、最終的に道としてはこういう通史の見方ができるというところを出していくという作業が非常に大きいと思う。そこはきちんとやっていかなければいけない。

【桑原部会長】 その他ご意見はありませんか。では全体としては通史型でいきたいということですね。

【川上委員】 通史的ということで一致していると思う。あとはボリュームの問題がネックではないか。

【桑原部会長】 何頁の本を作るというのは正確に決められるのか。

【轟原室長】 決められないです。ただ、多くの方が書店で手に取ってそこで気軽に買ってもらえるくらいのもものという想定がある。

【桑原部会長】 そういう意味での、道民に普及可能な形態と厚さの本ということですね。

【轟原室長】 厚さと値段とです。

【桑原部会長】 そうすると自ずと量も決まる。通史の②ぐらいがお手本になりそうですね。

【川上委員】 あまり厚くなくて値段も安ければ本屋さんで売れると思うが、北海道が出すものなので、北海道としての現在の分かる範囲での歴史そして歴史の見方が、今後の市町村史や学校現場でも参考になるべき。必ずしも誰もが書店で買って読めるものではないかもしれないが、それを利用して二次的に活用していくものではないのかなと私は思う。そういう点では一般の本屋ではそれほど売れないかもしれないがボリュームが欲しい。

【桑原部会長】 第1巻は装丁も変えるのか。

【轟原室長】 通史型なら上製本にする必要は無いと思う。

【桑原部会長】 それでは議題1は、量の問題はあるけれども、大まかな編集方針としては通史型でいくということによろしいですか。

【各委員】 はい。

(2) 委員の分担について

【桑原部会長】 この前お配りした資料にあるように、前近代と近・現代の2つの小部会に分けるというふうになっている。具体的に本を作る時に、自ずと2つの小部会に分けて編目内容を考えていくことになる。前近代が谷本委員と川上委員と葦島委員、近・現代が榎本委員と平野委員と私ということになる。これによって、細かい打合せは、全員で集まらなくてもそれぞれのグループで適宜集まって相談していただくことが可能。

最後に前近代の小部会の小部会長を3人の中で決めていただきます

か。

(3委員で協議。谷本委員に。)

【桑原部会長】 では、その形で新年度以降進めていく。

(3) その他

【葦島委員】 例えば考古学で委員に加えていただく先生として、思い当たるのは〇〇先生がふさわしいと考えている。他にも、この方がというアイデアがありましたら挙げていただきたいのですが。

【榎本委員】 近・現代の小部会にも、単なる執筆者ではなく、部会の中核に若い人を入れていった方がよいのではないか。

【桑原部会長】 おっしゃるとおりですね。

【桑原部会長】 この概説の部会は今年度は一応これで終わりにして、新年度でもよろしいのですか。

【靄原室長】 来年度、6月位に親委員会を開きたいので、それまでにもう少し「方針」がはっきり固まればいいと思う。今回は通史型ということだけが決まったが、具体的な方向性として、何頁位でそれほどこで区分してとか、また、要請のあったビジュアル的なものというのはどういう形で反映させるのかとか。こういう視点を取り入れるという文章的なものがあって、こういう概説を作るというのをはっきり示されると委員会でも検討しやすい。概説書の名前・タイトルも決まっていないので、それも案としてこちらの部会から出していただく。

【谷本委員】 全体のタイトルは決まっているか。

【靄原室長】 決まっていません。6月までに案として出して、6月に最終決定される。

【谷本委員】 あまりにもかけ離れると変ではないか。

【靄原室長】 全体としてのタイトルがあってもよいですが無くてもよいと思う。北海道現代史の部分と年表と全体についての概説があるということで、無理にひとくくりにする必要も無いと思う。

【桑原部会長】 それでは、概説にはどういうタイトルがよいか皆さんそれぞれお考えになってください。よろしくお願いします。

今日はこれで終わります。ありがとうございました。

【閉 会】

(了)